

中浜東一郎をめぐる医療人脈（その3）

一姻戚関係からみた医療人＝

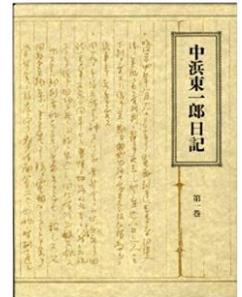
塚本 宏

はじめに

中浜東一郎（1857－1937）をめぐる医療人脈シリーズの第3回は、視点を変えて彼の長女・糸子と次男・清、それぞれの結婚に関わる姻戚関係者のお話しである。東一郎ご自身が明治・大正・昭和にかけて多方面に活躍したマルチな医療人であったこと^{1)、2)}から、彼の閨閥には優れた医療人が大勢おられても不思議ではない。以下、「中浜東一郎日記・全5巻」（以下、「日記」と略称）も参照しながらご紹介してみたい。



なお、個々の人名について、敬称略としたこととお断りし、プライバシーの保護にも留意して、参照した資料は公表されているもの（Wikipedia も含む）に限ったことを申し添える。



A 中浜糸子（1881－1964）の嫁ぎ先

糸子の方から始めると、東一郎・芳子夫妻の長女で、ジョン万次郎の初内孫に当たり、祖父から可愛がられて育ったことも想像に難くない。万次郎・終焉当日（1898（明治31）年11月12日）の朝も、京橋区弓町の自宅で彼女の読む新聞を取り合って戯れられたという、微笑ましくも痛ましい記載が「東一郎日記」に残されている³⁾（以下の日付は「日記」の記載日）。

封建的な風習が色濃く残っていた当時のこと、結婚は「家と家」との結び付きが主流であったことは言うまでもない。糸子は、日本人の創立した最初の私立女学校・跡見女学校を卒業（優等賞授与）後、明治34年1月から、東一郎夫妻は数人の友人に依頼して糸子の婿探しを始め、婚約者候補の高山正雄がまず東一郎宅を訪問（4月29日）、さらに芳子が片山国嘉宅へ足を運び媒介の依頼をし（5月3日）、続いて5日に東一郎も訪問して片山夫人から快諾を得ている。話は順調に進み、同年11月3日に高山正雄と糸子は目出度く星が丘茶寮で結婚式を上げている（媒酌人は、もちろん片山国嘉夫妻）。

1) 我が国の法医学の始祖・片山国嘉（1855－1931）

娘婿・高山正雄について語る前に、まず、媒酌人を務めた片山国嘉とはいかなる人物かを紹介することから始めよう。実は東一郎と片山とは因縁浅からぬ旧知の仲なのである。

片山の略歴は、次の通りである^{4)、5)}。

安政2年、遠江（現・静岡市）生れ、明治12年、東京大学（旧）卒業、生理学教室に入り、エルンスト・チーゲル教授の助手として「裁判医学」の講義・助手を担当、同14年に助教授（裁判医学と衛生学を担当）、文部省・海外留学生として、ベルリン大、ウィーン大にて裁判医学を研修（同17—21年）、帰国後、東京帝大の初代・法医学教授に就任（同21年11月）。同30年8月—34年10月には精神病学を兼担・東京府巣鴨病院・医長も兼務。（途中省略）、大正10年9月停年退官。



この間、「裁判医学」を「法医学」と改称したのも片山であったし（明治24年10月）、ウィーン大の恩師・ホフマン教授の著書「法医学大成」（全6冊）の翻訳、さらに「最新法医学講義」や「法医学図譜」などの専門書の著作

も行っている。

今日では人口に膾炙している、刑法第39条の「心神喪失者ハ之ヲ罰セス、……」の一条は片山の発案によると言われている。まさに法医学の始祖の名を辱めない片山の功績と言ってよい。

ご覧の通り、東一郎は、東大医学部でほぼ同時期に学んだ片山の2年後輩に当たる。



ここで、二人よりずっと著名な森鷗外についての研究者・山崎光夫が20年かけて調査した、いわゆる「鷗外・ベルリン写真」のことを披露しておきたい⁶⁾。

1888（明治21）年6月3日、ベルリンのフリードリッヒ写真館で撮影された19人の日本人医学者が一堂に会した、奇跡的ともいえる集合写真のことである。当時、陸軍省医務局次長（軍医監）であった彼らの共通の恩師・石黒忠恵がベルリンを訪問したのを機に、ドイツ留学中の

若きエリート医学者達の記念撮影である。主客の石黒と並んで前列中央にいる片山にご注目願いたい。東一郎、鷗外、さらに後輩の北里柴三郎が後列の両端に位置していることから、同じ留学生といえども自ずと彼らの序列が明らかに分かるであろう。（ここでは、恩師の石黒は別格だが、鷗外、北里をはじめ帰国後、わが国の近代医学の発展に寄与した個々の医学者の人物像についての詳細は、山崎の原著⁶⁾を参照して頂くことにして先を急ごう。）



2) 法医学の権威・高山正雄（1871—1944）

片山国嘉が、糸子と高山正雄の結婚式で媒酌人の労をとったのは、東一郎とドイツ留学時代からの縁だけというより、片山と高山は単なる師弟関係以上の「片山の愛弟子」だったからである。

以下の高山正雄の略歴⁷⁾をご覧ください。明治4年、伊那県筑摩郡（現・塩尻市）生



れ、松本の開智学校を経て、明治30年東京大学医学部卒（銀時計授与）、同32年東京帝大・法医学教室助教授（主任教授・片山国嘉）、文部省外国留学生として法医学研修のためドイツ（ベルリン大、ロストック大）留学（明治36-39年）、帰国後直ちに、京都帝大・福岡医科大学教授（法医学講座）に赴任、以後、学制改革に伴い九州帝大医科大学教授（同44年）、さらに医科大学長（大正8-15年）にも就任し、昭和6年に定年退官（名誉教授）したが、その後、長崎医大・学長（同9-11年）、短期間だったが、九州帝大総長（同17年7月-9月）も務めた。

在任中の学問的業績としては、「裏指紋」の研究とか「高山試薬（血液・血痕証明法）」の開発などがあり、一言でいえば当時、法医学の権威だった。また晩年、二つの大学のトップに乞われて就任したのも「頭脳明晰、清廉潔白な真面目人間」と評される人柄と手腕の持ち主だったからだろう。

東一郎一家とは、学会への出席、文部省との折衝など東京出張の際には度々訪問し、東一郎もまた九州出張の折には必ず高山宅へ立ち寄っていて、親密な親戚関係を保持していたことが「東一郎日記」の記載から伺える。

糸子との結婚の時期は東京帝大・助教授時代で、東京での新婚生活はドイツ留学前の2年間ほどだった。二人のエピソード⁸⁾を若干補足すると、正雄は、夢野久作の小説「ドグラ・マグラ」の登場人物（法医学者）のモデルだったとか、頭のさえた美男子で質素な生活に甘んじたため「色白で鼻筋通り金がなし」の川柳に譬える弟子もいたという。

また、やや脱線することをいとわず糸子について述べると、鷗外の紹介により知己を得た与謝野鉄幹から和歌の才能を見出され、与謝野晶子、山川登美子とともに、初期の「明星」誌上で活躍した才媛でもある。東一郎その人も漢詩、和歌の素養があり、即興の作品を「日記」にも書き留めているので、糸子も血筋は争えず、父の影響を受けたと想像しても無理ではない。

三人の女流歌人は、それぞれ「白萩の君」（晶子）、「白百合の君」（登美子）そして第三の「白藤の君」（糸子）と称されたが、惜しむべきは僅か10か月余で糸子は「明星」から身を引いている⁹⁾。その原因は謎のままではあるが、「日記」（明治35年6月から11月にかけての）を見る限り、糸子の婚家では夫・正雄の母（つまり姑）と、ひいては堅物の夫の「文芸」に対する理解の無さに起因していると思わせる節もある。作歌活動を非難されて実家へ戻り泣き出す糸子、「明星」へ出入りしたことはない「全面否定して謝罪」させられる糸子のありのままの姿が記載されている。女性活躍時代の現今では想像もできない社会的に弱い立場にあった当時の一般女性像を見る思いがする。

3) 消化器外科の第一人者・今永一（はじめ）（1902-1997）

前述の高山正雄・糸子の次女・峰子（東一郎の外孫）の夫君が今永一である。今永の略歴¹⁰⁾からも分かる通り、義父・高山正雄学長と同じ九州帝大出身とは言え、片山と高山のような師弟関係は見られず、今永は純然たる外科臨床医である。「日記」でも、東一郎の晩年、孫娘の夫・今永がドイツ留学へ出発のこと、上京した際に面談したこと程度しか記載されておらず、彼と峰子との結婚の経緯については全く触れてない。



今永一は、明治35年、大分県の生れ、昭和3年九州帝大・医学部卒、第一外科へ入局（赤岩八郎教授）、助手、講師を経て昭和11-13年にドイツ留学（在外研究員）、帰国直後に助教授、同14年、熊本医大教授（第一外科）に転任、附属病院長（同20-22年）を経て学制改革により熊本大学教授へ、さらに同24年に名古屋大学・第二外科教授に転出、名大・附属病院分院長を経て、教授兼任のまま同39年愛知県立がんセンター病院長（初代）、同40年、停年退官後、がんセンター・病院長専任となり、さらに同48-54年にはがんセンター・総長も務めた。

専門は消化器外科で、臍頭十二指腸切除後の消化器再建法の新法「今永法」を考案した、文字通り臍臓・胆道領域の外科治療の第一人者であった。

4) 生理学者・今永一成（1936～）

今永一・峰子の長男が今永一成（医学博士、福岡大学名誉教授）で、2013年の「万次郎忌」にも参加されて講演¹⁾をして頂き、晩年の祖母・糸子から折にふれジョン万・スピリット「決して諦めてはならない」を直に聞いたお話など拝聴することが出来た。

略歴²⁾は、昭和11年、福岡市生れ、昭和38年九州大学医学部卒、同大学院卒後、昭和44年から2年間スイス・ベルンへ医学留学、帰国後九州大学講師、さらに金沢医科大学教授を経て福岡大学教授（昭和54年-平成19年）、ご専門は基礎医学の生理学者（心筋・血管電気・分子生理学）で、日本生理学会（第80回会長）、日本臨床生理学会（第43回会長）、日本病態生理学会（第11回会長）など歴任。定年後は社会医療法人・原土井病院顧問。

現在も各地で、同じくジョン万次郎・五代目の子孫として、中浜京（当協会・副理事長）とともに講演活動に活躍なさっている。

ここで今永一成からご提供頂いた「名古屋大学第二外科今永一先生追悼集」に寄稿された、四代目・中浜博（1928-2008）の追悼文「今永先生との出会い」のことをご紹介しておこう³⁾。

実は博も名大・第二外科の出身だった。東京育ちの彼は、学習院高等科から昭和24年、名古屋大学医学部と慈恵会医科大学を受験して、見事に両方とも合格、慈恵医大には母方の親戚がいた（後述する）が名古屋には知人は一人もいなかった。いずれにするか迷った挙句、名大に決めて箱根超えをしたという。まったく思いもかけず、その年に今永一が名大第二外科教授として赴任され、当時、単身で着任された今永教授とお住まいが偶然、近所だったので、その年の初冬、二人は初対面され、以来、学生時代はもちろん生涯にわたる弟子としてお世話になるという因縁が生まれた。ただし、博は名大卒業後、マドリッド大・大学院で「心臓外科」を専攻し、帰国後、聖母病院、東京厚生年金病院を経て、精霊病院長（名古屋）、中日病院外科部長、交通医療協会診療所長などを歴任。「中浜東一郎日記」の刊行に際しては、度々ご上京され、富山房、生命保険協会との折衝など大変お世話になり心から感謝申し上げたい。惜しむらくは、ご生前、ジョン万次郎や東一郎について直接、もっと色々とお教え頂けなかったことが悔やまれてならない。

B 中浜清（1896－1967）の結婚

東一郎の次男・清（長男・幸が夭折したので、家督を継いだ）は、慶應義塾大学卒業後、ロンドンを経て米国・ブラウン大学（アイビーリーグ校の1つ、福沢諭吉も学んだことでも有名）卒業後、帰国して王子製紙に就職。

彼は、第二次大戦直前に「平和使節」として来日したホイットフィールド船長の4代目・ウィラードを迎えて、グルー駐日大使も参加した帝国ホテルでの盛大な歓迎晩餐会を主催したり、戦後になると、「新・ジョン万次郎伝」の著者、エミリー・ワリナー女史の執筆に協力（東一郎の「中濱萬次郎傳」の一部を英訳など）を惜しまなかった。

さて、清の縁談も、長女・糸子同様、顔の広い東一郎が交友関係を使って大正15年の始め頃から花嫁候補探しに奔走している様子は「日記」に書かれている。その詳細は割愛するが、縁結びの神、あるいはキューピット役（今日とはかなり意味は異なるのだが）として登場するのが、前述の片山国嘉の長男・片山国幸であった。

1) 慈恵医大・初代整形外科教授・片山国幸（1884－1962）

なぜ、片山なのかを語る前にまず、函館市の篤志家・石館友作（1872－1950）のことを紹介しておかねばならない¹⁴⁾。

明治5年、松前郡福山町出身、酒・味噌・醤油製造業兼郵便局長の資産家の家に生まれた石館友作は、父の跡を継いで、函館区会議員、函館商工会議所議員などを歴任、函館貯蓄銀行頭取、さらに北海道銀行重役を務めた経済人だった。彼は、次代を担う青年の活動に関心を持ち、土地建物・建築費など10万円相当の寄付を申し出て「函館市青年会館」を建設(昭和8年)し、戦後は「函館市公民館」と改称され、青年学級、婦人学級などの社会教育・福祉増進の活発な活動が認められ文部大臣賞を受賞した郷土の恩人であった。

この友作の長女・喜美が片山国幸夫人だった。そして次女・はな（華子）の結婚に際して石館・中浜両家の縁結びに尽力した国幸のおかげで、帝劇での見合い、両家の承諾、結納の儀式と、とんとん拍子にすすみ、清・はなの結婚式は昭和2年7月10日、日比谷大神宮にて目出度く挙行されたのだった（媒酌人は福島行信（日の出生命・重役）だった）¹⁵⁾。

国幸と清は、夫人同士が姉妹という義兄弟の仲になるし、片山・父子が二代にわたって中浜家の長女と次男、それぞれの縁結び役を務めたのは奇縁というしかなかろう。

ここでようやく、片山国幸の略歴¹⁶⁾を披露することにしよう。



初代
教授 片山國幸

片山国幸は、明治17年、片山国嘉の長男として東京生れ、明治43年、東京帝大卒、直ちに整形外科入局(田代義徳教授)、同43年—大正3年にドイツ留学(私費)、大正11年に慈恵会医大教授に就任(整形外科・初代)、同13—14年、内務省社会局・慈善事業協会囑託として欧米出張(身体障害者の後療法研究)。昭和初期の義手、義足研究の第一人者となり、肩関節離断術後の「片山式能動義肢」の研究・開発に努めた。「一般医科に必要な整形外科」(昭和12年)、「臨床整形外科学」(昭和15年)などの著書もあり。

中浜家の家系図をご存知の方なら、容易にお気づきのことだが、前述の博が慈恵医大を受験(合格しながら名大に進学)した理由の一つに、母の姉・喜美の夫(母方の義理の叔父になる)が初代・慈恵医大・教授であったことが挙げられるのは当然であろう(博本人もそう述べているが、実際に彼が受験した当時は、すでに二代目の片山良亮教授に代わっていたのだが)。

余談ながら、今永一教授の実弟・三津彦は、東京帝大・経済学部卒後、石館友作の四女・美代と結婚(養子縁組)したが、中浜家とも親交があり博に熊本時代の今永教授のことを話していたという¹³⁾。石館・今永両家とも縁続きになる。

2) 戦後の整形外科学界の権威・片山良亮(1901—1982)

東一郎の没後に活躍された片山良亮と、中浜家との親密な関係は見い出されないが、簡単に紹介しておこう¹⁷⁾。



第2代
教授 片山良亮

片山良亮は、明治34年、三重県出身、旧姓・「城」、昭和2年、慈恵医大卒、整形外科入局(片山国幸教授)、助手、講師を経て同20年主任教授(国幸の後継者で第二代)に就任。第三病院長を経て附属東京病院長(同37年—)、同41年、定年退職、その後同56年まで東急病院長を務めた。

大著「片山整形外科 上・下」(昭和29年)、「片山整形外科手術書 上・下巻」(昭和41年)の著書あり、戦後、わが国の整形外科学界をリードした権威であった。

3) 日本薬学界の巨星・石館守三(1901—1996)

石館守三もまた、前述の清の妻・はなとは従兄妹(つまり父・友作の妹・きみ夫妻の三男)の関係になる、著名な医療人である。すでに、2016年の万次郎忌の懇親会に参加した、守三の三男・石館光三からご尊父の感動の生涯について講演をいただき、詳細な評伝「父を語る—北東北の生んだ薬学会のパイオニア(青森市名誉市民 石館守三)」¹⁸⁾も「研究報告・第7集」に転載されている¹⁹⁾。

従って今更、追加することもないが、これまでの医療人と同様、略歴紹介²⁰⁾ののち、2、3のエピソードを記すに留めたい。



石館守三は、青森市出身、大正14年、東京帝大医学部薬学科卒、ドイツ留学（在外研究員として昭和11-14年、ハイデルベルグ大）を経て、同14年、助教授、同17年教授（初代、薬品分析化学）、戦後の学制改革後も引き続き東大教授、同33年-35年に東大・薬学部長（初代）に就任。同36年に定年退官、その後も国立衛生試験所長（同40-45年）、日本薬剤師会長をはじめ数多くの要職を歴任。

この間、樟脳の強心作用を解明し「ビタカンファー」（通称ビタカン、俗称カンフル注射）、ハンセン病の特効薬「プロミン」、さらにグルクロン酸合成と「グロンサン」などを創薬して輝かしい業績をあげ、学士院賞の授与も受けた、まさに日本薬学界の巨星であった。

なかでも戦争末期に開発したプロミンは、不治の業病であったハンセン病患者を治療出来ることを実証した最大の貢献であった。守三自身、父・喜久造が始めた薬種商を中学時代から手伝い、当時、青森郊外にあった「らい病隔離施設」へ薬の配達をした際、見聞した悲惨な患者の実情を何とか救いという志を持ち続け、プロミン投与により「治療第一号患者」の劇的な治癒に成功している¹⁸⁾。多摩全生園収容の重症・末期患者が、自ら新薬の実験台になることを志願した逸話は、守三の人類愛と相まって誰しも心底、感動を禁じ得ない。

もちろん、守三の悲願や研究があつてこそだが、当時の厚生省・医系技官としてハンセン病入所者の生活改善に積極的に取り組み、「らい予防法廃止」（平成8年）に尽力された、大谷藤郎（1924-2010、公衆衛生局長、医務局長を歴任、退官後、国際医療福祉大学・初代学長）の活躍も忘れてはならない（WHOから公衆衛生分野におけるノーベル賞と言われるレオン・ベルナルを授与されている²¹⁾）。

また、大衆保健薬「グロンサン」は、高度成長期の1960年に発売されたが、2年後には流行語にまでなった、あの「5時から男」の商業で文字通り爆発的ヒット商品（年間50億円を超す）となった。一方で、アリナミンとともに「科学的な根拠」に疑問ありと、「薬効」論争²²⁾に火をつけた社会問題になったことも覚えておこう。

最後に、守三は敬虔なキリスト教信者で、病めるアジアの民衆のためにキリスト教医療協力会の創設に取り組むなど、「神と人に仕えた」人生だった。晩年の主治医兼指導医をなされたのは、ご存知の聖路加国際病院長、「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」協力の会・理事長だった日野原重明（1911-2017）だった。お二人は同じキリスト者としてご親交があり、笹川良一から資金供与を得て発展途上国のハンセン病その他の感染症制圧のため設立された「笹川記念保健協力財団」の理事長職を日野原に引き継いだほどの仲であったから当然と言えよう。日野原の指導の下「医療専門家と家族全員による最高のホーム・ケア（在宅医療）」が具現され守三は安らかに昇天されたのであった。

4) 石館光三（1943～）

守三の三男・光三もまた、薬学の研究者であり、その略歴²³⁾は次の通りである。

1967年、東北大学医学部薬学科卒、東京医科歯科大学・難治疾患研究所助教、米国ミシガン大に留学（1977-79年）、帰国後、同難治研・准教授（中毒化学のち分子細胞生物学）を経て、帝京平成

大学薬学部教授（2004－09年）、2009年からは（公財）東京生化学研究会（主として薬物治療、新医薬品創製に対する研究助成と若手研究者の育成に協力する財団で、1960年に守三が設立した）の常務理事を経て現在、専務理事を務める。

なお、光三は当協会・賛助会員であることも付言しておく。

5) 石舘敬三（1936～ ）

守三の長姉・えつの三男が敬三で、守三の甥、かつ光三の従兄弟に当たる。

略歴²⁴⁾は、1957年、順天堂大学医学部卒、国立公衆衛生院修了後、東京都庁に勤務、一貫して公衆衛生行政に従事、東京都保健所長（島しょ保健所長として小笠原赴任の経験もあり）、衛生局・医務部長、福祉保健局・技監、島しょ地域保健医療協議会・会長など都庁の要職を歴任。退官後は、東京都結核予防会・理事長、日本公衆衛生協会・理事、順天堂大・客員教授などを務めている。

当協会の例会にも度々、参加されて、万次郎所縁の小笠原についての体験談を聞かせて頂いた。

むすび

ジョン万次郎の長男・東一郎は、偶々、筆者と同じ明治生命保険（相）に勤務したという奇縁から、保険医学だけの先達としても敬愛してやまない人物である。その人物像に迫ろうとして既に2回にわたり、彼をめぐる医療人脈を探索してしてきた²⁵⁾。

今回は、東一郎の長女と次男の結婚から生じた姻戚関係の医療人を調査し、優秀で、しかも著名な医療人が数多くおられることを確認することができた。

直系のご子孫は勿論、姻戚関係の医療人もまた、東一郎の影響を直接、間接に受け、今日なお、万次郎の研究、顕彰を通じて国際親善の活動に尽力されていて喜ばしい限りである。

最後に、親戚・姻戚関係の諸兄弟がいつそう「絆の輪」を広げ、ますますご活躍されることを心から念願してやまない。

以上

注

- 1) 塚本宏：「東一郎とはどんな人物か？」、草の根通信79号、11－12頁、国際草の根交流センター、2014年
- 2) 塚本宏：「中浜東一郎日記」に見る晩年の万次郎、土佐史談会257号「中浜万次郎」特集号、93-110頁、2014年
- 3) 中浜明編：「中浜東一郎日記 第一巻」、383－385頁、富山房、1992年
- 4) 泉孝英編：「日本近現代医学人名事典」、170頁、医学書院、2012年
- 5) 山崎光夫：「明治二十一年六月三日 鷗外『ベルリン写真』の謎を解く」、131－141頁、講談社、2012年
- 6) 5) に同じ、8頁
- 7) 4) に同じ、374頁

- 8) Wikipedia による
- 9) Wikipedia による
- 10) 4) に同じ、75頁
- 11) 今永一成：2013年「万次郎忌」の講演記録、研究報告・第4集、73-76頁（ジョン万次郎・江東の会）
- 12) 今永一成：「強く生きる一仲濱（ジョン）万次郎の生涯」、七隈の杜、第12号。10-19頁、福岡大学、2016年
- 13) 中濱博：「今永先生との出会い」、名古屋大学第二外科今永一先生追悼集、120-121頁、1998年
- 14) 「函館ゆかりの人物伝・石館友作」、ステップアップ300号、函館市文化・スポーツ振興財団、2014年
- 15) 中浜明編：「中浜東一郎日記 第五巻」、83-90頁、富山房、1995年
- 16) 4) に同じ、170-171頁
- 17) 4) に同じ、171頁
- 18) 石館光三：「父を語る一北東北の生んだ薬学界のパイオニア（青森市名誉市民 石館守三）、ビタミン87巻11号、643-650頁、2013年
- 19) 研究報告・第7集、97-107頁（中浜万次郎の会）、2016年
- 20) a) 4) に同じ、47頁、 b) 蝦名賢造：「石館守三伝一勇ましい高尚なる生涯」、新評論、1997年、（参考までに石館家の詳細な「家系図」が掲載されていることを付言する）
- 21) Wikipedia による
- 22) 松枝亜希子：1960-70年代の保健薬批判、Core Ethics、9巻、211-220頁、2013年
- 23) Wikipedia による
- 24) Wikipedia による
- 25) a) 19) に同じ、166-171頁、 b) 研究報告・第8集、180-187頁（中浜万次郎の会）、2017年